

# 地研通信

発行人 雨宮照雄  
 編集人 村田温子  
 発行所 三重短期大学地域問題  
 総合調査研究室  
 津市一身田中野字蔵付157番地  
 〒514-01 TEL (0592)32-2342

題字 岡本祐次学長

## 答志島の観光の現状と問題点

室長 雨宮照雄

### はじめに

答志島は伊勢湾口に位置する周囲約20キロ、面積約7.8平方キロの島であり、830世帯、約3,600人の人口を有する。

就業者の約半数が漁業従事者であり、就業構造の上からは典型的な漁業の島といえる。また、年間25万人を超える観光客が答志島を訪れており、観光業は漁業と同程度かまたはそれをやや上回る生産額をあげており、島の重要な産業である。しかし、観光客も新鮮な海の幸と海水浴、つまり海の魅力を求めて答志島を訪れるのであり、答志島は海に依存し、海を生活の舞台としていると言つて過言ではない。

漁港を中心にした賑わい、日の出を背にして出漁する漁船、素朴な島の人情など答志島には海に生きる人々の生活が醸し出す土地の個性がある。

しかし、若年層の流出に伴う高齢化、漁業資源の減少と経費の増加による漁業生産の不安定さ、ここ数年の観光客の横ばい現象、離島であるが故の医療体制の不備、定期船の不便さなど答志島の産業、生活を取り巻く環境は厳しい。

当研究室は、鳥羽市の委託を受け昭和62年7月から10月にかけて「答志島開発構想調査」を行った。調査には、雨宮照雄、柴橋正昭、正田敬志、平野孝の四名が当たった。その結果は、「答志島開発構想調査報告書」として刊行されている。

報告書は、第1章で答志島の社会・経済の現状を概観し、第2章で観光の現状を分析し、その問題点を詳しく取り出している。第3章では海洋性レクリエーション導入の可能性、リゾート地としての開発の可能性、答志島架橋のメリットやデメリットなどを検討したうえで答志島開発構想を提言し、開発に際しての留意点を述べている。

ここでは、そのうち第2章を中心に調査の概要を紹介したい（なお、紙面の制約から図表は省略した）。

### 第1節 答志島観光の歴史

答志島は古くから漁村としての性格が強く、訪れる観光客も以前は少なかった。昭和30年までは、釣り客、行商人を対象とする旅館がわずかに4軒を数えるのみであった。

答志島に旅館が増えてくるのは昭和30年代以降である。この時期、高度成長によって、伊勢湾の汚染が進行し、あぐり網・バッチ網などの漁業が衰退した。30年代に旅館を開業した者の大部分は水産加工業や網元から転業した者である。

40年代後半から50年代前半にかけて離島ブームに支えられて観光客は着実に増加し、それにつれて旅館数も増加した。45年から46年にかけての観光客の飛躍的な増大は近鉄烏羽線の開通によるものである。民宿は50年前後に増加している。

しかし54年以降は観光客数、旅館数とも横ばい状況が続いている。原因としては、オイルショックによる低成長経済への移行、離島ブームの終えんなどが考えられる。烏羽市全体でも観光客数はここ数年横ばい状況である。

### 第2節 観光特性（答志島の魅力）

昭和59年度には年間26万8,000人の観光客が答志島を訪れている。観光地としてみた場合、答志島はどのような特徴を持つのだろうか。

①【短期滞在型】答志島を訪れる観光客の大部分は一泊または二泊であり、三泊を超えるものは少ない。従って、答志島観光の第一の特徴は短期滞在型観光であるといえよう。

②【家族で海水浴や海の幸を楽しむ】観光客の約2/3は家族客である。このことから人数も3～5人のケースが多い。また、観光客が答志島に求めるものは海水浴（39.7%）と新鮮な海の幸を楽しむこと（33.0%）である。

このように答志島は、海の魅力によって家族の短

期的なレジャー需要に对应しているといえよう。

しかし、このことは、逆にいえば、団体客が少ないことを意味している。団体客の占める割合は、1～2割であり、今後、会社の慰安旅行や研修、修学旅行などの誘客に積極的に努める必要があろう。

観光客が島の魅力として挙げたものは、①「海の幸(味覚)」(47.6%)、②「旅館などのサービス」(17.5%)、③「島からの眺め」(15.9%)、④「海岸線の美しさ」(10.6%)であり、答志島の魅力は海にあるといつてよい。

そして、答志島を訪れた観光客は海の幸(味覚)に関して味の点でも、料金の点でも非常に高い評価を与えている。

### 第3節 答志島観光の現状

#### (1) 観光客

##### ① 観光客数の推移

先に見たように答志島観光は30年代に成立し、40年代以降発展してきた。観光入込客も40年から54年にかけて約7倍に増加している。これは、近鉄鳥羽線の開通や旅館などの宿泊施設の増加や宣伝・誘客・口コミなどによる評判の高まりに基づくものであろう。しかし、54年以降横ばいが続いており、それに対処することが求められている。昭和59年度の増加は、ラッコブームの波及効果によるものであろう。

##### ② 地方別分類、交通手段

答志島を訪れる観光客を地方別に分けてみると、近畿地方(59.4%)が最も多く、次いで中部(23.5%)、県内(10.6%)、関東(3.9%)となっている。近畿が多いのは近鉄の利便性によるところが大きい。

なお、このことに関連して、鳥羽まで利用する交通手段は、近鉄(56.5%)が最も多く、次いで自家用車(32.8%)、伊勢湾フェリー(4.4%)となっている。関東から鳥羽に来る場合、伊勢湾フェリーを利用することで、所要時間を約一時間短縮できるため、関東からの観光客がフェリーを利用することは多い。

また県内からの観光客が少ないことは、今後、宣伝・誘客を進めるうえで注意する必要があるだろう。

##### ③ 消費額

観光客が答志島滞在中に消費する額(宿泊費、飲食費、みやげもの代などを含む)は一泊あたりで1万円から1万5千円が最も多く、次いで、1万5千円から2万円が多い。この値は全国の観光

地と比較してさほど差がない。ちなみに、旅館組合に対するヒアリング調査によると、宿泊料金の平均は一泊1万3千円であり宿泊料金の約40～60%が料理代である。

しかし、長期滞在型観光を旨とする際には宿泊料金の低廉化がひとつのポイントになろう。

#### (2) 宿泊施設

##### ① 宿泊施設の概要

〔地区別の立地〕43軒ある宿泊施設のうち和具地区に26軒と約6割が集中している。答志地区は13軒であり、桃取地区は4軒と少ない。また、民宿は答志地区に多い。和具地区に宿泊施設の立地が多いのは、海水浴場が近いこと、鳥羽からの交通の便がよいこと(鳥羽～和具20分、鳥羽～答志32分)、観光性商業の一定程度の集積などが挙げられよう。

立地場所については、特に答志地区において、旅館と民家との混在が見られ、改善が必要である。

〔種類、規模〕答志島の宿泊施設は旅館では普通旅館が多く、その他民宿が8軒ある。従って、収容能力も60人以下のところ全体約3/4を占めており、概して規模は小さい。

〔経営形態〕経営形態は、ほとんどが自営であり、会社組織として株式会社1、有限会社2をわずかに数えるのみである。

〔従事者〕収容能力の小規模な宿泊施設が多いところから、従事者も少ない。専従者については、答志島全体で26軒のうち19軒が4人以下であり、家族で経営しているところも多い。また、宿泊客の季節変動に対応するためにパート従事者に依存しているが、答志島全体で20軒のうち13軒はパート従事者が4人以下である。また、旅館組合に対するヒアリング調査によれば、桃取地区から和具地区へパートに出ている婦人が多い。

〔経営者〕経営者の年代は40代が最も多く、ついで50代が多い。また、約6割が後継者がいると答えており、後継者問題はそれほど深刻ではない。

〔付帯収入〕売店、スナックなど付帯施設をもっているところは約3割と少ない。

〔兼業〕約半数が宿泊業以外の事業を兼ねており、水産加工業、漁業、海産物卸売業など漁業に関係したものが多く。

##### ② 経営状況

約8割の経営者が5年前と比較して宿泊客数も売上高も、利益も減少していると答えている。また、旅館組合からのヒアリングによれば、宿泊数

の主流は二泊から一泊に移行しつつあり、4、5年前までは土、日に客があったのに、最近では客のない日もあった。更に、稼働率は良いところで30～40%であり、悪いところでは10%台に落ち込んでいるという声もきかれる。

将来の経営の見通しについては、約7割の経営者が「悪くなる」と答えており、「現状維持」を合わせると約9割にものぼる。

このように、経営者の多くは危機感を抱いている。

### ③経営の問題点と将来の経営方針

経営上の問題点については多方面に亘って指摘されている。まず、建物に関するものが全体の約1/4を占める。内訳は、建物の老朽化、客室不足、立地難などである。売上不振、経費の増加、利益の低下など収益に関するものは全体の1/3を占める。労働力(従業員)に関するものはほぼ1割程度あり、答志地区では労働力不足が、和具地区では従業員教育の不足が指摘されている。その他、宣伝不足、資金難、競争激化、企画力の不足など経営のソフト面にかかわる問題点も指摘されている。

約7割の経営者が事業継続の意志を持っている。今後の経営方針としては、館内娯楽施設、売店・レストラン・スナックなど付帯施設整備を挙げるものが合計して23.1%と最も多く、ついで宣伝・誘客の強化(20.7%)、料理の工夫と質の向上(18.3%)、従業員サービスの向上(17.1%)が多い。

### ④ 宣伝・誘客

答志島の宿泊業者の宣伝方法の特徴は、「自社で宣伝している」(31%)が最も多いことである。ダイレクトメール、定期的なふるさと便の送付、釣りニュースの発行、車で巡回するなど実にきめ細かく直接顧客に働きかけている。また観光客が答志島を知ったのは「知人から」(56.6%)が最も多く、また毎年のように答志島を訪れている常連客も多いことがわかる。つまり、答志島観光は、口コミや宿泊業者と顧客との個人的、直接的コミュニケーションが重要な要素となっている。

また、答志島の魅力として新鮮な海の幸(味覚)を安く提供できるという点が宣伝されている。

なお、鳥羽市観光協会では、近鉄と共同して、秋の行楽シーズンに「オートラム・キャンペーン」を実施しているが、そのうち答志島に関係のあるものは、⑦漁火見物船(答志島旅館組合主催)

⑧たい網観光(答志島旅館組合主催)⑨釣り大会

(鳥羽観光協会主催)である。

### ⑤ 宿泊施設のサービスに対する観光客の評価

宿泊施設のサービスや料金に対する観光客の評価は極めて高い。また、答志島に来て一番印象に残ったこととして、「旅館などのサービス」(17.5%)や「島の人情」(7.3%)を挙げる人が多く、このことから観光客を迎える暖かいもてなしが好感をもって受けとめられているといえよう。

### (3) 観光資源

#### ① 海

答志島の魅力は何といっても海である。海は古くから島民の生命を育み、生活を支え、慣習や文化を創り出してきた。海は島民にとっては生活の基盤であるが、また、人工的な都会生活を送る人々にとっては、海はふるさとであり、ロマンと解放感を与えてくれるものである。その意味で、海は答志島の最大の観光資源である。では答志島観光はどのように海を活用しているだろうか。

#### (食べる)

先に、答志島を訪れる観光客の第一の目的は新鮮な海の幸を味わうことにあることをみてきた。そして、この点では、観光客の一応の評価を得ているが、これは旅館の経営努力の賜である。

当研究室が旅館組合に対して実施したヒアリング調査によれば、旅館で出す魚介類の50～60%は地元で納入されたものである。一部の旅館では、漁協のセリに自ら仲買人として参加する権利を持っており、また、自らとってきた魚を食卓に出すところもあると聞いている。

そして、多くの観光地が、刺身や天ぷらという画一化された料理の中で個性を失っていったのに対して、答志島の旅館では、新鮮な魚介類を加工せずに生のまま観光客に提供する姿勢を貫いている。料理の点でも鯛、伊勢海老、アワビなどが6、7年前のほぼ倍の値段になっているにもかかわらず、原料費の倍に料理代を押しやる努力がなされている(本土では、原料費の3倍の料理代をとるところもあるといわれている)。

多くの観光地において、地元の新鮮な魚介類を使う姿勢をなくしたとき、それらの衰退が始まることはしばしば見られるところであるが、その中で、答志島の旅館の努力は評価されていだろう。今後とも、海が答志島観光の最大の魅力であり続けることは確実であり、このような姿勢を保持し続けることは大切である。

## 〔遊ぶ〕

### a. 海水浴

答志島の海岸線は鳥羽湾に面している南側を除いて砂浜が少ないため海水浴場の適地は限られている。答志島には海水浴場が2ヶ所（大間ヶ浜、川尻・小浜）あり、どちらも旅館組合により管理されている。このうち大間ヶ浜は昭和62年度にオープンした。

### b. 釣り

釣り船は答志地区に21隻（漁協登録数）あり、桃取地区には30～40隻あると推定されている。和具地区にはない。

いずれも、3トン未満の小型船で、一般漁業と兼業しており、個人経営である。高齢者の行うケースが多い。利用者は土、日が多いが、利用客数は不明である。利用料金は答志地区の場合、4名で13,500円、5名で16,500円が相場である。一般漁業の漁場を荒さないように規制が加えられており、現在のところトラブルは発生していない。

今後とも、このような観光性漁業は需要の増加が見込まれるし、高齢者に格好の就業機会を保障することができるので、発展させてゆくことが望ましい。

## 〔眺める〕

海からの日の出や日の入りは格別であり、また、夜の漁火はロマンチックで絵になる。しかし、それ以上に漁港の風景は興味をそられる。朝、夜明け前、薄明りの中を、一隻、一隻漁場へ向かう漁船をみていると海の男のロマンが伝わってくる。また、朝夕、魚を満載した船が港に帰ってきて漁協でセリが行われる。はねている魚と人々の喧騒が見るものを興奮させる。

漁港は島民の生活の中心であるが、観光客にとっては答志島の中で最もおもしろい見所ではなからうか。

### ② 名所、旧跡など

観光客が訪れる（予定も含む）場所としては「九鬼嘉隆の首塚・胴塚」がもっとも多く「八幡神社」「柿本人麿歌碑」「答志桃取スカイライン」がそれに続く。九鬼嘉隆や九鬼水軍は答志島のイメージとしてかなり定着していると見て差し支えない。

### ③ 祭り

答志島には古くから伝わる祭りが沢山ある。代表的な祭りは美多羅志神社の櫛屋祭（とうやの祭り）と天王祭、および八幡神社の神祭、弓祭りであるが、これらの祭りは現在のところ観光資源として利用されていない。

### ④ 答志温泉

昭和61年に答志島に温泉が掘当てられている。発見者の中川徳次氏（みやげもの店「王将」経営）によれば、61年8月に発見し、62年2月に認可を受けたこの温泉は、18.9度の冷泉で、泉質はナトリウム・カルシウム一塩化物冷鉱泉であり、一日約20トンの湯量がある。現在は中村屋旅館一軒だけが利用しているが（約5トン）、さらに数軒の利用が可能である。答志島は火山帯に位置していないので温泉は出ないが、中川氏は56年から中断しながらも発掘を続けたと聞く。温泉は答志島観光にとって新しい魅力を加えることになり、今後利用が拡大することが望ましい。

### (4) 観光と地元経済

就業者別の産業構造の上からは、答志島における基幹産業は漁業である。漁業従事者49.2%に対し、サービス業従事者は19.6%であり、第三次産業従事者全体をとっても39.0%しかなく、漁業に及ばない。しかし、生産額（所得）の面で見たらどうであろうか。要素所得別産業構造のデータは入手できないので、ここではごく大まかに観光の地元経済に及ぼす効果を推定してみよう。

昭和59年度において、観光客が答志島で消費した額を推定してみよう。①宿泊能力は2,098人である。②平均稼働率を25%と仮定すると宿泊客は約19万人と推定される。③宿泊客の一泊あたりの消費額を1万3千円と仮定すると、宿泊客の消費額は約25億円である。従って、日帰り客のことを考慮すれば、59年度の観光客の消費額の総計は約30億円弱と推定される。同年の漁業生産額は、三漁協の取扱額の合計から、約26億円である。従って、観光は答志島において漁業と匹敵するか、またはそれをやや上回る生産額をあげていることになり、地元経済の中では最大の産業といえる。

観光産業は単に観光施設や宿泊施設の生産額（所得）として現われるだけではなく、宿泊施設への原材料の納入や、飲食等の観光客の消費活動などを通じて多面的に地域経済に波及効果を及ぼす。

ここでは、答志島における観光関連産業の実態を調べてみよう。

### a. 観光性漁業

観光性漁業としては、釣り船とたい網観光を挙げることができる。

釣り船については、先に述べたので、ここではたい網観光についてその現状を見ておこう。

たい網観光はただ単に観光客に新鮮な魚介類を提出するだけでなく、観光客自身が巻網漁船に乗り実際の漁に参加し日常生活と異なる体験をしてもらうことを目的に行われている。旅館経営者の個人営業であるが、旅館組合の協力を得て運営されている。昭和61年の利用客数は3,800人、年間売上額は760万円である。

現在のたい網観光は鳥羽観光の一つのイベントとして定着し、宣伝もよく行われている（近鉄主要駅にパンフレットがおかれているなど）。たい網観光は観光性漁業というよりは、むしろ、海の魅力を生かした観光事業の性格が強いが、高齢の漁業従事者に就業の機会を提供するという側面も持っており、今後このような形態で、観光とむすびついた漁業を開発し育ててゆくことが、観光業者ばかりでなく漁業従事者にとっても大切であろう。この他に、旅館への魚介類の納入を拡大することも観光と漁業との結びつきを強めるという点からは大切であろう。

#### b. 観光性農業

答志島の農業は自家消費を目的にしたものであり、市場での販売を目指してはいない。従って、旅館等で使用する米、野菜についても答志島以外で生産されたものが用いられている。答志島の農業の発展を考えるならば、農業の生産性をあげるための基盤整備や経営改善も当然必要であるが、旅館との注文生産、契約栽培の道を模索して、魚介類ばかりでなく、野菜等についても答志島の味を観光客に提出することを検討してみる必要がある。

#### c. 観光性商業

観光性商業の状況を見ると答志島にはスナック9、喫茶店1、寿司屋3、食堂4、みやげもの店8がある。飲食店の客層も主に地元客であり、観光客を対象にした店は少ない。答志島に対する観光客の不満として「昼食のための食堂がない」「みやげもの店が少ない」という意見があり、観光客を対象としたしゃれたレストランや喫茶店を置き、観光客の要望に応える必要があることを示している。

また、後に詳しく述べるが、アワビを始めとする魚介類は売られているが答志島独特のみやげものや名産品が開発されていないことは問題である。

小売店は、酒などのアルコール類や海産物を中心に旅館に納入しており、観光との結び付きがあ

る。

桃取、和具に籍を置く観光船はあるが、活動の舞台は佐田浜であり、鳥羽にきた観光客に対し島巡り観光を行っている。しかし、答志島の歴史、文化などを説明しながら答志島を案内するという姿勢に欠けている。

観光船はまた、定期船以外に本土と答志島を結ぶ海上交通手段として利用されており、チャーター料金は片道8,000円程度と言われている。

このように、答志島における観光性商業は十分にしか形成されていない。

### 第4節 答志島観光の問題点

#### (1) 短期滞在型観光からの脱却

第2節で見たように答志島の観光特性は「家族の短期的なレジャー需要に新鮮な海の幸と海水浴で応える」という点にある。

しかし、今後もこの方向性のままで答志島観光はやって行けるのであろうか。

近年の観光客の横ばい状態や経営の悪化に対して旅館経営者は強い危機感を抱いている。

たしかに、近年の観光客の横ばい状況は低成長経済への移行など答志島だけでは解決できない外部的要因に基づいている面もある。しかし、他方、答志島の観光特性自体が時代の流れからずれてきており、観光客のニーズにうまく応え切れていないという面もあるのではないだろうか。

今後の観光の動向として次の点に留意することが必要だろう。①週休2日制や夏の長期休暇の普及による余暇時間の増大が見込まれること。②観光レジャーが多様化してきていること。即ち、「見る」ばかりでなく、「食べる」「遊ぶ」「する（スポーツ）」「学ぶ」「参加する」「創る」といった多面的な視点が観光レジャーに求められるようになったこと。③その土地独特の歴史、生活、環境、風俗、祭り、味、文化など、要するに地域の個性が重要視されるようになったこと。

今こそ、答志島を訪れる観光客が一泊または二泊の短期滞在型であるのはなぜかを真剣に問うてみなければならない。たしかに、国民の大多数はまだまだレジャーに長期間を割く余裕がないという観光客の側の原因があるという議論もなりたつであろう。しかし、「答志島に観光客を長期間引き付けておく魅力があるか」と逆に問い返してみるのが大切ではあるまいか。

海の幸と海水浴だけでは多様化する観光客のニーズに対応できない。答志島が潜在的に持っている

る魅力を発掘し、観光客を一日でも長く答志島にとどめておく努力をすることが、近年の低迷を打破する上で必要である。

(2) 海の魅力を生かしきれていない。

答志島観光は海によって成り立っている。新鮮な海の幸、海水浴、釣り、たい網観光、離島に残る人情など、現在答志島の魅力を形成しているこれらのものは海を抜きにしては語れない。

他の観光地にたいして答志島がアピールできる最大の魅力は今後とも海でありつづけるだろう。

では、答志島観光はこの海の魅力を生かしきっているだろうか。

a) 海洋性レクリエーションの導入

近年変化しつつある観光ニーズの一つの特徴は、観光客が自ら参加すること、つまり活動性を求めていることにある。

海洋性レクリエーションについても、海の幸を賞味し、海水浴を楽しむといった旧来のレジャー形態ではなく、ヨット、サーフィン、スキューバ・ダイビングなどのより活動的な形態が求められつつある。

海は人類に残された未知の領域であり、今後、バイオテクノロジーを生かした海洋資源の利用が積極的に図られるであろうし、海は新しい産業、文化、生活の拠点となるであろう。

しかし、答志島においては、海の観光利用は部分的なものにとどまっている。たしかに、海は、漁業活動の重要な舞台であり、また、島民の生活や文化にとって貴重な財産であるから、海の観光利用は、漁業や島民の暮らしと調和するように最大限の配慮を払いながら、進められなくてはならない。だが、海の観光利用と漁業をはじめとする島民の暮らしとを両立不可能なものと考えことは間違いである。適切な「海のゾーニング」などの規制を強化することにより、両者は共存してゆけるのであり、今後、答志島の魅力を高めてゆくためには、海洋性レクリエーションの積極的な導入を観光業者ばかりでなく島民全体で検討してゆくことが必要である。

b) 海水浴場、海の整備

先に見たように海水浴をするために答志島を訪れる観光客は多いが、観光客の海水浴場に対する不満は大きい。「きれいにしてほしい」「規模が小さい」「砂浜が少ない」などが主なものでほかに「海水浴場が遠い」「売店が欲しい」という不満もある。

せめて、ゴミ、海藻類を片付けて売店、シャワ

ーなどの設備を充実させることが大切である。また、海辺にしまった喫茶店、レストランを置き、泳ぎつかれたときゆったりくつろげる場所が欲しい。

c) 観光性漁業の発展

先に、釣り、たい網観光などの観光性漁業の現状についてみた。これらは、観光の魅力づくりばかりでなく、漁業従事者に雇用の場を提供するという観点からも今後とも発展させてゆくことが大切である。

そのほか、小、中学生の体験学習として、漁業を活用することも検討してはどうか。これは、団体客を獲得してゆくことになり、答志島観光に新しい質を付け加えることにもなる。

(3) 観光地の整備、ルート化

答志島の名所・旧跡は少なくないが、概してそれらの整備状況は悪く、また観光客に対する案内は不十分で観光ルートさえ確立していない。

特に答志島の歴史的遺産としては最大のものである「九鬼嘉隆の首塚、胴塚、血洗いの池、洞仙庵」は、全くといってよいほど整備されていない。また、名所・旧跡の多くは道順が解らず、案内や説明が不十分であり、周辺には漁具などが放置されているところもあった。

これらの状況を見ると、自分の住む土地と歴史に誇りをもち、それを外部からの観光客に案内し、知ってもらおうとするもてなしの心が、観光に携わる人々ばかりでなく島民全体に欠けているといわざるを得ない。ことに、旅館業者を中心とする観光に携わる人々は、これらの名所・旧跡を整備する義務をこれまで怠ってきたことを深く反省する必要がある。

具体的には、①名所・旧跡の環境を整備し、観光ルート化すること。②観光客への案内を十分にし、歴史資料館を設置すること。③レンタカー・レンタサイクルを設置し、観光客がこれらの場所を回ることを容易にすることが必要であろう。

(4) 祭り、行事の活用

先に見たように、答志島の祭りは観光資源として活用されておらず、また、行事(イベント)にも注目すべきものはない。

当研究室が実施した住民アンケートによれば、60.2%の人が、祭・行事を観光資源としてもっと利用の方がよいと答えている。

また、多くの地方で、まちづくりや観光振興のために青年会議所などが中心になって、祭りの発掘や見直し、活用が行われていることを考えると

き、答志島においても積極的に取り組む必要があらう。たしかに、祭りは、古くから島民に受け継がれてきたものであり、観光用ではない。しかし、観光客はその土地独特の風土や慣習、言い換えれば個性に触れることを求めてその土地を訪れるのであり、今後、観光を中心にしたまちづくりを進めるうえでは、祭りの活用という視点は重要な要素となる。

特に催し物（イベント）の開催は今後真剣に検討してゆかねばならないものの一つである。答志島を舞台にして、広く県内外から人を呼べるような行事を作り出し答志島の新しい名物としてゆきたい。

(5) 答志島を代表するみやげものがない。

和具港には、みやげものを扱う専門店があるが、そこで売られているものは、答志島でとれた魚介類をのぞいては、どの観光地でも売っているものでしかなく、しかも、島外で加工されたものが多い。

今後は、①答志島を代表するみやげものを開発する。②答志島でとれた原材料を島内で加工することにより、1.5次産業の育成を図る、という二つの観点に立って、島民のアイデアを結集することが大切である。

当研究室が実施した住民アンケートによれば、「今後開発すべきみやげもの・名産品はなんですか。（自由記述）」という問に対しては、島の特産品である海産物を指摘する声が圧倒的であった。例えば、「干物の加工」「ワカメ、ノリ、ヒジキ、アラメの加工」「タコの加工」「シャコエビの加工」など魚貝類、海藻類の加工が大勢を占めた。その他のものとしては、「各種貝殻を利用した工芸品」があり、ほとんどが海産物に集約できる。「他の土地の産物を答志の産物として売ってはいけない」「海産物が産地の割に高い」と批判する声もある。いずれにしろ、今後「答志島ならではの名産品を研究・開発・PR・販売する」必要があり、このためには、「島の特産品を数点指定すべきである」「島の名産品を選定してPRして売り出すべきである」という建設的な意見も見受けられた。

(6) 交通

a) 定期船・港

答志島についての観光客の不満や要望は交通問題ことに定期船に関するものが多い。特に「便数が少ない」「最終便の時間が早い」ことが問題とされている。

たしかに、現在の定期船は島民の日常生活の交通手段として位置づけられており、観光客の輸送をその主要な目的としていない。このことは、桃取、和具、答志の三つの港がいずれも漁港であり、観光港として位置づけられていない（従って、定期船専用の棧橋も和具港にはない）ことにもあらわれている。

しかし、現在でも年間約25万人の観光客が訪れていることを考えれば、観光客の島への輸送交通手段を充実させることは最優先課題であると考えべきである。架橋、フェリー就航も検討されてよい。とりあえず、当面の措置として、夏の観光シーズンの臨時便の増発、定期船専用棧橋の建設には早急に取り組むべきであろう。

また、鳥羽から近いこと、旅館が集中していることなどから、和具港で乗降する観光客は多く、同港は答志島の表玄関となっている。それに伴って和具港は旅館の送迎用マイクロバスが集中して港周辺は違法駐車が多く、また、観光客の乗降と相俟って、漁港、生活港としての機能を阻害している。従って、①定期船専用棧橋を建設し漁港と分けること。②港湾センター（待合室）を設置し、みやげもの店や喫茶店・レストランを収容して観光客がゆっくりできる施設をつくるとともに、③周辺に旅館の送迎用マイクロバス駐車場を配置することによって、和具港の整備を図らなければならない。

b) 道路

観光客が利用しうる島内交通手段は旅館のマイクロバスに限られている。レンタカー・レンタサイクルを設置して、手軽に観光客が利用できるようにする必要がある。

また、島内周遊道路は、島内の開発にとって不可欠であるばかりでなく、観光客が島巡りをする道路としても利用できる。

(7) 観光業者間の連系

当研究室が実施したアンケートによれば、旅館など宿泊施設の経営者27人のうち12人（44.4%）が、観光業者間の連系がとれていないと答えており、とれていると答えたものの2倍を占めている。

特に、答志島観光全体の利害を考えた活動の取り組みが行われていない点が問題である。観光地としての環境整備、答志島への観光客の誘致のための共同キャンペーン、イベントの開催などが今後必要であろう。

なかでも、住民との意見の調整はもっとも重要

な課題である。先にも見たように、生産額（所得）の上ではともかく就業構造の上では、観光業は少数を占めるにすぎず、漁業には及ばない。従って、観光振興、観光を中心としたまちづくりを進めるためには、住民との話し合いを繰り返して合意を形

成するよう努める必要がある。観光業者は町内会、漁協などの住民組織との協調を強め、各志島全体の発展のために指導性を発揮することが求められるのではなからうか。

〔 受 入 図 書 一 覧 〕

本研究室が昭和60年3月に受入れた図書は次のとおりです。

都市商業の挑戦	望月照彦	データ解析入門 SPSSへの招待	司馬正次
公益法人の経理と税務 [改訂]	米山鈞一著	日本アルマナック 1986	
地方自治と議会制	久礼義一	図説 日本の住宅事情	
日本人の選挙行動		建設省住宅局住宅政策研究会	
綿貫譲治 三宅一郎 猪口孝 浦島郁夫		現代稲作の技術構造	波多野忠雄
日本の地方政府	大森弥 佐藤誠三郎	水田利用再編と土地改良	加藤 譲
地方自治の選択	高寄昇三	厚生年金保険法総覧	社会保険庁
サラリーマン税金訴訟	北野弘久	どけんのあゆみ	土曜研究会
わかりやすい男女雇用機会均等法		日本21世紀への展望 現代行政法学会集4	
赤松良子 花見忠		国土庁計画調整局	
アメリカの地方自治 一州と地方団体		行政計画法	宮田三郎
ジョセフ・ツインマーマン		変革時代のまちづくり・むらおこし	川俣芳郎
新しい地場産業の創造 新地場産業集積圏構想		A I ACE ONE 優活用ハンドブック	
中小企業庁計画部計画課監修		岡崎光男 飯島弘文 鹿島博	
現代財政 一理論と政策一		パソコンワープロのキー入力を10倍速くする法	
大阪大学財政研究会編		鹿島博 飯島弘文	
現代西ドイツ地方財政論行政争訟研究双書		マルチプラン・ガイドブック 鹿島博 飯島弘文	
伊東弘文		マルチプラン・ビジネスフォーム集	
行政委員会と行政争訟制度	和田英夫	鹿島博 飯島弘文	
新公益法人会計基準の解説		PC-9801 シリーズBASIC入門 榊正憲	
内閣総理大臣官房管理室編		現代行政全集9 厚生(Ⅱ) 高辻正己 辻清明	
現代地方自治法入門 現代法双書		PC-9800 シリーズ はじめてのBASIC	
室井力 原野翹		戸内順一	
統計解析プログラム講座1 統計解析プログラムの基礎	芳賀敏郎 橋本茂司	時事年鑑 1987	
統計解析プログラム講座2 回帰分析と主成分分析	芳賀敏郎 橋本茂司	公務員白書 昭和61年版	人事院
PC-9800 シリーズ MS-DOS 3.1 & プログラミング	菅原康一	警察白書 昭和61年版	警察庁
		地方自治 小六法 昭和62年	自治省行政局
		昭和61年度 中小企業白書	中小企業庁
		補助金総覧 昭和61年度	財政調査会

〔 編 集 後 記 〕

師走 せかせか せかせか 何となく落ち着かない年の瀬  
 ココム違反、円高、株価大暴落、航空機事故、INF全廃条約調印等々、いろいろありました。

充実した、忙しかった、楽しかった、苦しかった、反省ばかりの……の1年。様々の思いの1987年が過ぎ、又新しくそれぞれの1年が始まります。皆様どうかよいお年を。(M)